

2006年センター試験「漢文」解説速報

【全体講評】

雪の中の受験、ご苦勞様でした。

大方の予想どおり、漢文はかなりやさしくなりました。レギュラーの授業に出ていた諸君は、やさしすぎて拍子抜けしたかもしれません。満点が取れて当たり前という感じで、平均点は大分上がるでしょう。しかし、もちろん誰でも満点が取れるわけではありません。去年から指摘しているように、ある程度漢文の勉強をして臨んだものは案々と満点を取れるが、そうでないものは五・六割から、よくて七割という二極化がより進むと思われます。やさしくなったので二十点以下の人は減ると思われませんが、その得点差が詰まって取りこぼしが出来ず厳しいとも言えます。こうなると時間配分の失敗は、ほとんど命取りになるでしょう。

具体的には、最大の変化は問題文が短くなったことです。「国語Ⅰ・Ⅱ」と「国語Ⅰ」の区別がなくなったので、ある程度は予想はされましたが、例年二〇〇字前後だったものが、今年は約一五〇字と、旧「国語Ⅰ」に近づきました。これが、やさしくなった最大の原因です。従来のような凝った文章構成の問題文は、今後もう出なくなるかも知れません。設問に関しては、すでに昨年から変更が始まっていたので、ほぼ予想されたとおりでした。一昨年まであった返り点や書き下しを問う問題はなくなり、結果として問Ⅰ以外はすべて内容読解に関わる設問となりました。文章を速く正確に読む力があれば、句形の知識などあまりなくても高得点が可能です。ということは、量をこなしている人が圧倒的に有利で、泥縄で句形だけ覚えたとような人は、意外に苦戦したかもしれません。選択肢も全体に短めになり、迷うような設問もないので、十分以内で解けてしまった人も多かったのではないのでしょうか。時間が余った分、他の問題の見直しに使えて、何だか得した気分になったかもしれません。

【読解のポイント】

特に難解な表現もなく、凝った構成でもないので、素直に読めば理解できる。鼠の話の筋がわからなかった人はいないだろう。設問に關しても、ひとつひとつの文が正確に読めていけば、たやすく解けるものばかりである。傍線部Bまでが鼠に関する例話（エピソード）で、「噫」以下がそこから導き出される結論である。「人」と「狸奴」の対句がポイントであることは言うまでもない。そして、さらに唐突に「君子」が出てくる最後の文が、この文章の主題（テーマ）であるのは、いつもやっている問題と同様である。全体としてやさしくなっているが、文章の展開の仕方は、授業で何度もやったように、漢文の文章の典型的パターンであり、読み慣れた人ならすぐに「ああ、そういう話ね」と了解したことであろう。

【設問解説】

問1 (1)は説明不要だろう。何度もやったように「つひに」。

(2)も説明済み。「度」は「温度・角度」からわかるように、ものさしやめもりの意。それを動詞に用いれば「はかる」の意となり、転じて人の心などを「おしはかる」という意味にもなる。熟語は「忖度」。

問2 「その前後の状況を説明したもの」を選ぶという従来なかったタイプの問題であるが、要は内容読解であり、文脈がきちんと押さえられていけば難しくはないだろう。どちらも主語は鼠で「復」+動詞なので、「鼠はふたたびくした」ということ。

(ア)は直前の部分の意味が正しくとれば簡単だろう。「杖を投げたが当たらなかった。鼠はしばらくやめたがふたたびした(嚙った)」というところで④が正解。

(イ)も同様。「童子が追うと隠れたが、童子が寝るとふたたび嚙った」というところで⑤が正解。

問3 傍線部の送り仮名が省かれているのは、従来のセンター試験ではあまり見られなかった形式。といっても、私大では当たり前だから、特に問題はないだろう。おまけに、本文2行目に同じ表現があるので、「命レA B」という(使役)の句形であることは誰でもわかる。「童子に命じて、猫を連れてきて、寝室内に置かせた」ということなので、当然⑤となる。

問4 やさしい。「磔磔たる者、寂として聞こえず」というのだから、猫の投入によって、鼠がかかる音が聞こえなくなったということ、②であることは簡単にわかるだろう。

問5 唯一、ちよつと構文的な解釈が必要な問題。とはいえ、「霊」の意味さえ正しくとれば難しくはない。「霊」に「すぐれた」という意味があることは、冬期講習や直前講習でもやったばかりだったので、すぐ思い出したにちがいない。「霊長類」とか「霊験」という熟語をノートに書いたはずである。あとは「非不」という(二重否定)と、「能」「不能」の「できる」「できない」が訳せれば完成。「人は鼠よりすぐれていないのではないけれど、鼠を制することは、人にはできないが、猫にはできる」というのが直訳。当然のことながら、対句になっている次の文の内容もヒントとなる。よって①が正解。

問6 定番の主題を問う問題。「読解のポイント」でも述べたように、当然最後の文が筆者の言いたいことである。この文だけだと「其の職」の解釈にちよつと迷うところだが、鼠の話から導き出された結論部分の意味を考えれば、何を言おうとしているのかはわかるだろう。鼠退治はやはり猫にお任せということで、人にはそれぞれふさわしい職分というものがあるという結論である。「其」という代名詞がしばしば英語の「his・her」と同様、「自分の」と訳した方がよいことは、授業で何度も説明したとおりである。したがって、正解は②となる。

【書き下し文】

胡子夜臥するに、鼠の案に嚙む有り、其の声磔磔然たり。胡子鼠の其の書を傷るを懼るるや、乃ち暗に投ずるに杖を以てす。杖鼠に中る能はず。鼠暫く止めて復た作す。遂に童子に命じて起きて之を逐はしむ。鼠稍竄れ去る。童子の枕に就くに及び、鼠復た嚙みて已まず。時に狸奴別室に乳はる。胡子鼠の去る能はざるを度るや、是に於いて童子に命じて狸奴を取りて臥内に置かしむ。是に由りて向の磔磔たる者寂として聞こえず。噫、人鼠よりも霊ならざるに非ざるも、鼠を制すること人に能くせずして、狸奴に能くす。狸奴人よりも霊なるに非ざるも、鼠狸奴を畏れて人を畏れず。然らば則ち彼各職有るなり。君子の其の職に居るも、亦た其の職を尽くすのみ。

【現代語訳】

私が夜寝ていると、鼠が机の上でかじっている音がカリカリとした。私は鼠が私の本をかじるのを懼れたので、暗闇に杖を投げつけたが、杖は鼠に当たらなかった。鼠は暫くかじるのを止めていたが、ふたたびかじり始めた。そこで召使いの少年に、起きて鼠を追い払うように命じた。鼠はようやくどこかに隠れ去った。ところが少年が床に就くと、鼠はふたたびかじり始めてやめない。その当時、猫が別室で飼われていた。私は鼠を追い払うことができないとわかったので、そこで少年に猫を連れてきて寝室内に置くように命じた。これによって、さっきまでのカリカリという音は、シーンとして聞こえなくなった。ああ、人は鼠よりもすぐれていないわけではないのに、鼠を制することは人にはできないが、猫にはできる。猫は人よりもすぐれているわけではないのに、鼠は猫を畏れて人を畏れない。ということはずなわち、人にはそれぞれ向いた職分が有ることである。君子の自分にふさわしい職にある者もまた、自分の職務を尽くすのである。

(漢文担当 門屋)